

受難節第3主日礼拝 説教 「崩され、砕かれこそ」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年3月7日

ヨブ記 1章 1～12節 マタイによる福音書 16章 13～28節

受難節を歩む私たちを、主はこの日も変わらずに御前へと集めてくださっています。そして、その私たちがこの日忘れてはならないことは10年前の東日本大震災です。あれから間もなく10年が過ぎようとしています。10年前の3月11日はレントに入ったばかりの金曜日でした。そして、私たちの国、私たちの社会、そして、私たち自身も、この日を境にその姿形を大きく変えることとなりました。何一つ変わってはいないと思えるものも、変えられたものの大きさを思えば、同じ元の姿形を留めるものではないからです。小さなものはより小さく、大きなものは更に大きく、違いが際立っていたのがこの10年でもありました。そして私たちに与えられた昨年来の試練は、私たちにそのことを一層強く思わせるものでもありました。

震災時、私たちが思い起こさせられたことは、私たち一人一人は実は強くつながり合っているということでした。そして、このことを私たちに思い起こさせたものが、あの震災直後に繰り返し語られた絆という言葉でもありますが、しかし、多くの人々の口にも上ったこの絆という言葉もやがて語り尽くされ、10年が過ぎ、人々の口にも上ることも少なくなっていくように思います。そして、その中で一番大きく変わったものが国や社会を形作る私たち自身であったように思います。復興復興と邁進し続けてきたこの10年、国や社会が大きく変わったのは間違いありません。けれども、この10年を通して、大きく変わったものは、私たちの周辺だけではなく、環境を作り出している私たち自身でもありました。そして、それを象徴しているのが、このコロナ下、絆という言葉ほとんど耳にした記憶がないということです。では、私たちはどのように変わったのでしょうか。それは、良くなったとも悪くなったとも言えるのでしょうか。津波の被害に見舞われた東北沿岸では、高い防潮堤が築かれ、住民たちは高台へと移転し、安全と安心が担保されることとなりました。それゆえ、このことが少なからぬ平安をもたらしたのでしょうか。けれども、このことが必ずしも住民の暮らしをよりよいものとしたわけではありません。良くしよ

う、良くしたいという発想が返って暮らしにくさを人々に強い、あれほど口にされた人々の絆を断ち切ることになったのです。なんとも皮肉な話ではありますが、震災以後、良くも悪くもなった国や社会のあり方は、それゆえ、私たちに大きな変化をもたらすことにもなりました。それは、私たちが変わることを求めなくなったということです。

それは、私たちの諦めに近い気持ちがそうさせたとも言えるのでしょうか。しかし、震災以来、あることが当たり前であったものが、それは、人が人として生きる上での軸のようなものでもありますが、この私たちの心に深く刻みつけられた、ある意味での揺るぎない確信が震災を通し、大きく揺さぶられ、変えられていったのです。そして、そこで示されたことが、生きる上で絶対ということは何もないということでした。ですから、この10年、私たちが失ったものは、この嘘でもいいから絶対と言える確信であったように思うのですが、従って、私たちが変わることを求めなくなったのはそれゆえのことでもありました。ただ、この「絶対」ということは何もない」との真実は、それ以前にも古より繰り返し聞かされてきたことでもありました。ですから、人をしてそう思わせるものは、東日本大震災だけに限ったことではありません。けれども、それ以前と比べ、やはり何かが違うように思うのです。それは、子どもたちからこの「絶対」という言葉を聞くことがなくなったからです。

様々な天災、不況など、国全体を覆う暗い影に脅え、深い絶望を感じてきたのがこれまでの私たちであったと思います。私たちがヨブ記の御言葉に深い共感を覚えるのはそれゆえのことでもあるのでしょうか。しかし、絶望を経験しながらも、その向こう側には、まだ見ぬ希望の光を感じていた、マッチ売りの少女やフランダーズの犬を読んで、そこに自らを重ね合わせていたのはそれゆえのことでもありました。ところが、今はどうでしょうか。今の私たちにとって、絶望という言葉の対極にある言葉とは一体どんな言葉なのでしょう。もちろん、私たちは希望という言葉を知っています。けれども、

希望という言葉を目にし、想像力をどれだけかき立てられ、また膨らませることになるのでしょうか。希望という言葉はただ知っているにすぎず、どれだけの人々が、この言葉と自分とを直接関わりのあるものとして信じているのでしょうか。そして、そのことは、若者たちが自分と直接関わりのある将来しか語らなくなったことから分かります。つまり、夢を見なくなったということです。それだけではありません。私たち自身はどうでしょうか。自分の置かれている現実、生きている状況をこの手で変えたい、良くしたいと強く願うことがどれだけあるでしょう。良くしたいということは、このままではいけないということです。ただし、この変えたい、良くしたいということは、地面をブルドーザーでならすようなものではありません。共にいる人々との今のこの暮らし、その暮らしの中にもどれだけ多くの人の姿を見ているか、と言うことです。つまりは、変えたい、良くしたいとの思いは、私たちの生活に根ざすもので、気持ちや考え方の問題ではないということです。そして、それを支えるものが、私たちが共に同じ一つの場所に居続けているということです。けれども、この10年の変化は、隣の人は何する人ぞ、ということを経験して、気がついたら、あれ、いなくなっていたということでもありました。

それは、私たちの、人と一緒にいる、いたいという感覚がどんどん少なくなってきたからだと思います。そして、それは、ある意味で私たちが今に満足しているからでもあるのでしょうか。けれども、それはまた、私たちが人を、絆を求めなくなっていくということなのかもしれません。だから、その瞬間瞬間の満足を得られればよいということにもなるのでしょうかし、また、そのために、大きな期待を抱かなくなったり、そういうことでもあるのでしょうか。そして、それは、私たちが傷を広げ、深くすることに、それだけ脅えているからでもあるのでしょうか。そのため、縦の物が横になっても気がつかないし、また気がつかない。つまり、私たちは、絶望することを意図的に遠ざけようとしているということです。そして、この傾向があの日を境に強くなってきたように思うのは私だけではないように思います。このことはつまり、あの日を境に私たちが意識せずに行っていることは、絶望を忘れることであり、絶望という言葉そのものを葬

り去ろうとしているということです。しかし、御言葉が私たちに求めることは、ヨブ記が語るように、この絶望という言葉は忘れることではありません。その反対です。そして、それを神ご自身の経験として語るのが十字架の出来事でもあるのですが、それゆえ、私たちに求められていることは、絶望を葬り去ることではなく、私たちの目の前に置くことです。ただし、その求められ方は、私たちが、主にあって、主と共に、ということです。絶望をも私たちと共にする主が私たちと共にいませばこそ、私たちは、この先に希望を見ることになるからです。

ですから、聖書の御言葉が語る強いメッセージは、絶望を忌避することではなく、私たちが正しく絶望することです。それは、私たちがこのイエス様の十字架という深い絶望を経験し、この十字架をそれぞれの胸にしっかりと刻みつけなければこそ、私たちの目の前には、希望の光が大きく強く指し示されることにもなるからです。従って、クリスチャンとは何かと問われれば、正しく絶望を経験した者、この絶望を知っているがゆえに正しく希望を待ち望むことのできる者、それが私たちクリスチャンであるということです。ですから、そういう意味で、今のこの時代において私たちがこうして生きていることは、世に対して大きな証しとなります。絶望を忘れ、葬り去ろうともがくこの時代にあって、絶望を避けず、この絶望をも恵みとして正しく受け止める術を知っているからです。それゆえ、私たちの存在は、必ず希望をもたらしこととなります。それだけではありません。絶望に限らず、希望に繋がる様々な言葉を持っているのが私たちなのです。ですから、言葉を失った現代において、私たちの存在はかつてないほどに大きな意味を持っている。そして、それが大きな意味を持つことになるのは、この日の御言葉に登場する、ヨブ始め、ペトロと弟子たちがそうであるように、イエス様に対する期待とその絶望感を、私たちが本音で本気で語っているからです。そして、それは、私たちが神様にもイエス様にも忖度せず、すべてをあけすけに語っているからでもあります。ですから、そういう意味でも私たちは語るべき言葉がないのではなく、語るべき確かな言葉をもっている、それが私たちクリスチャンであるということです。そして、震災直後の主日礼拝で、私自身、当時の教会の人々に強く語ったことでもありました。

しかし、その時の私がどれだけ御言葉が語る真実を伝えられたかは分かりません。しどろもどろであったことを思いますし、前日には、原発が木っ端微塵に吹き飛んでいる映像を見ておりますので、かつて静岡の浜岡原発の直ぐ近くの教会に仕えた者としては、想像力を際限なく膨らませるものでもありました。ですから、その時、冷静を装いながらも、冷静さを失っていたのは間違いありません。語るべき言葉を持っていると語ったのはそうした中でのことではありますが、そして、この語るべき言葉とはつまり、ペトロがここでイエス様に向かって「あなたはメシア、生ける神の子です」と語ったこの本音です。そして、そこで大事なことは、ここでのペトロがそうであるように、それが押しつけられてはいないということです。神の子であるイエス様との一体感、そして、それは、母と子の一体感に近いものなのかも知れませんが、この一体感こそが、絶望の中で人をしてイエス様への信仰を告白させることにもなるのです。ですから、そこには当然喜びがあります。それも、自分だけが嬉しい嬉しくないと言うことではありません。それを共に分かち合う者がいると言うことです。ここではその一人がイエス様でもあります。ただし、信仰の喜びはイエス様お一人とだけ分かち合えばいいというものではありません。私たちがイエス様に喜ばれる一人ひとりであるように、この同じ経験をしているのが私たち一人ひとりであるからです。ですから、この経験は私たちにとっては絶対的なものであり、それゆえ、絶望に包まれた中でも私たちから失われることはありません。真実であり、真理である、神様の御名が「あつてあるもの」と言われているように、あるものはある、ただそうとしか言えないものでもあるのです。まただから、イエス様もまたペトロに真実を語ったのです。「自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている」とペトロ始め、その弟子たちに真実を打ち明けることになったのです。

ですから、ペトロ初め弟子たちの信仰が真実なものであったのは間違いありません。それゆえ、この信仰の上に立つ私たちの教会も、また私たち自身も、この真実に触れたがゆえに、主の御前においてふさわしくあることができるのです。ただし、そこで私たちの考えるふさわし

さとはどういふものなのでしょう。信仰の奥義を詳らかにするイエス様を人から見えないところに連れて行って、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあつてはなりません」といさめたペトロのこの姿の中に、私たちは何を見つめることになるのでしょうか。そこで、この情景を想像していただきたいのですが、同じ状況に置かれた私たちはイエス様に向かって何を語るのでしょうか。それがどんな言葉であるのかは人それぞれであるのですが、信仰を言い表した直後の言葉に嘘はないはずで、それゆえ、それは、私たちが大切にしている「ふさわしさ」の現れでもあるのでしょうか。なぜなら、それが私たちのある意味での本音、心の中にある真実でもあるからです。そして、イエス様に対するペトロの本音が「そんなことがあつてはなりません」との言葉でありました。ところが、ペトロのこの本音をイエス様は「神のことを思わず、人間のことを思っている」と厳しい評価を下すのです。しかも、このペトロのことを「サタン、引き下がれ、あなたは私の邪魔をする者」とまで仰ったのです。そして、困ったことにペトロのこの姿は、私たちの多くは自分自身の姿を見出すことになるのです。

このことはつまり、私たちには、信仰ゆえにイエス様から「サタン」と呼ばれる可能性があるということです。そして、このことはまた、イエス様が「私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上で繋ぐことは、天上でも繋がれる。あなたが地上で解くことは天上でも解かれる」とペトロに語るように、私たちの行状のすべてをイエス様も神様もすべてご存じであるということです。ですから、それだけにまた私たちは自らを問わずにはいられない、自分は御前において相応しいのかと。そして、相応しくあろうとするがあまり、イエス様と神様の御心を慮り、忖度することが信仰であると思うようになるのです。ところが、イエス様は気遣うその私たちの気持ちを大きく揺さぶるのです。信仰にしがみつき、イエス様にしがみつき、信仰を盾にしてイエス様を操ろうとする私たちの卑しさを崩し、砕こうとするのです。けれども、それは、私たちにとってはとても恐ろしいことです。自分を見失うだけでなく、中心を、生きる上での軸を失うに等しいことでもあるからです。それゆえ、十字架の出来事は、その私たちにさらに追い打ちをかけることとなります。イエス様の

ことを「あなたはメシア、生ける神の子です」と語る自分、「サタン、引き下がれ」とイエス様からそう断言される自分、この見たい自分とみたくない自分との間で、身を引き裂かれる思いがするからです。そして、御言葉は、そのことを言い表すために「この日から」という言葉を用いて、それ以前とそれ以後とを区別するのですが、それは、ガリラヤの春を謳歌したその信仰も、十字架を救いの手立てにしようとするその卑しさも、そのそれぞれを兼ね備えているのが私たちであり、それが私たちのありのままの姿でもあるからです。

それゆえ、私たちはこの現実に抗おうとするのですが、けれども、それを私たちは自分の力で変えることはできません。ペトロの二つの本音が、私たちが信仰ゆえに、この二つの間を行ったり来たりするものであることを明らかにするのです。それゆえ、この行ったり来たりが私たちを絶望へと導くことにもなるのです。しかし、この落ち着かない歩みは、私たちにとって、本当にただ不快で、恐ろしい、見たくもないものなのでしょう。ペトロはじめ弟子たちの姿を通してこのことを考えたいのです。それは、この私たちの揺らぎは、絶望を感じると同時に、共にいます主イエスの救いを知る歩みであり、その赦しと信仰ゆえの喜びに与る時間でもあるからです。また、そうであればこそ、ここでイエス様がペトロのことを「シモン・バルヨナ」と一個の人間として親しみを込めてこう呼びかけます。まただから、私たちは、幼子のようにイエス様の呼びかけに素直に応えていくことができるのです。そして、そこで、私たちの与る救いと赦しでもあります。それは、喜びを伴うものでもあります。そして、喜びが伴うということはつまり、嬉しいし、楽しいし、それゆえ、喜ばしいものであるということです。ですから、そこからは当然イエス様と神様への感謝があふれ出ることもなりますし、また、喜びが伴わなければ、当然、謝罪の言葉が出てくることにもなります。つまり、それが、ありがとうとごめんなさいということでもあります。それは、間もなく卒園を迎える子どもたちに、私自身、これまで繰り返し何度も伝えたことでもありました。ところが、卒園を迎えた子どもたちを前にして私が改めて思わされたことは、この感謝と懺悔を忘れずにいて欲しいということではありませんでした。

人が生きる、生きているということは、互いに互いを傷つけあうということです。そして、それは、イエス様も神様も同じです。「サタン、引き下がれ、あなたは私の邪魔をする者」とのイエス様のお言葉は、そのことを私たちに伝えてくれているように思うのです。それは、イエス様が喜んでいないからです。ですから、傷ついているのは、私たちだけでなく、イエス様も同じです。けれども、この傷が私たちにとっての生きている証しそのものでもあるのです。崩され、砕かれることは、苦しく、辛く、痛みを伴うものです。そして、その私たちに先立ち、十字架へと向かわれたのが私たちと共にあるイエス様でありました。つまり、そのイエス様が私たちとどこまでも共にいてくださっているということです。ですから、ペトロに投げかけたイエス様の厳しいお言葉は、イエス様から投げかけられた呪いの言葉などではなく、イエス様の祈りの言葉だと、私はそう思うのです。しかし、だから、私たちにはその将来が必ず約束されているわけではありません。御心にそぐわなければ、御心から外れていくしかないからです。けれども、だからこそ神様は、十字架という私たちが生きるための中心をこの世界に置いたので、私たちには再びイエス様と出会うことができるかどうかは分かりませんが、けれども、その中で一つだけはっきりと言えることがあります。それは、共にあるイエス様に対し、私たちが素直に本音を語り続けるなら、ここでペトロがそうであるように、痛い思いをしつつも、イエス様の御前にある私たちは、神様の赦しを経験することになるのです。十字架はそのために私たちの目の前に置かれているのであり、ですから、私は、己が十字架を負うということは、イエス様と共にいまし、そのイエス様が私たちと離れずに導いてくださっていることを信じ、素直に日々本音を語り続けることであると思うのです。けれども、それは、主の御前にあつて、ということであり、自分の満足だけを求めるその心の内側ではありません。ですから、そのために私たちは正しく絶望するものでありたいと思えますし、それゆえに希望に向かって、いつまでも共に歩み続ける私たちでありたいと思うのです。揺らぎつつも、主は私たちと共にいます、主の御心の内に止まり、終わりの日まで共に歩み続ける私たちでありたいと思います。祈りましょう。